

## 第4回GPSを利用した観光行動の調査分析に関するワーキンググループ 議事概要

開催日時：平成26年4月18日（金） 14:00～16:15

場 所：中央合同庁舎3号館4階特別会議室

出席者：

### <委員>

相原 健郎 国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系 准教授  
清水 哲夫 首都大学東京大学院都市環境科学研究科 教授  
岡本 直久 筑波大学大学院 システム情報工学研究科 准教授  
加藤 史子 (株)リクルートライフスタイル じゃらんリサーチセンター 主席研究員  
(センター長 沢登次彦 代理)  
神尾 文彦 (株)野村総合研究所 社会システムコンサルティング部 部長  
河村 清孝 (株)ゼンリンデータコム ネットサービス本部  
WEB-GIS事業部 部長

### <オブザーバー>

内閣府消費者庁消費者制度課個人情報保護推進室  
総務省情報通信国際戦略局情報通信政策課  
総務省総合通信基盤局電気通信事業部消費者行政課  
経済産業省商務情報政策局情報経済課  
経済産業省商務情報政策局サービス政策課  
国土交通省総合政策局情報政策課  
国土交通省観光庁観光戦略課調査室

福島県 観光交流局 観光交流課  
静岡県 文化・観光部 観光・空港振興局 観光政策課  
北海道富良野市 商工観光室  
新潟県湯沢町 産業観光課  
山梨県北杜市 産業観光部  
徳島県三好市 産業観光部  
長崎県佐世保市 観光物産振興局

1. 開会挨拶
2. 委員紹介
3. 議事

(1) 第3回ワーキンググループの議事概要について

(2) GPS機能による位置情報等を活用した観光行動の調査・分析の指針（案）について

#### ◎委員からの意見

- ・この指針を読んで、分析をしていこうとする主体が地方自治体であることを前提に考えたとき、たとえば日帰り旅行の定義については、指針にあるような数字を示していったほうが良いのか、独自で考えていった方が良いのか、というところでは、後者と考える。各地域のターゲット、また各地の資源の特性や事情を踏まえて、自分たちで定義しなさいという書き方が良い。
- ・例えば国や都道府県でとっている統計のやり方に準拠し、それに整合するような形で定義づけして、関係したデータをとるということであれば定義は重要だと思う。しかし、統計では分からない、地域のもっと細かく見たいというニーズに対して、やり方のヒントを与えることをこの指針の目的とするならば、定義にはこだわらなくても良いと思う。地域でこういう現象を見たいとか、地域で観光行動だと思っているものを自由に分析できるように広げておいた方が良い。
- ・解像度の細かさを高めていくと、プライバシーの問題やデータの量の問題で統計的には分析できないということとなろう。どのレベルまで技術的に分析できるのか、なおかつ、こういうニーズに対してはこういうデータの取り方、解析をしたほうがいいのか、そういう風に対応ができてくると、指針を見たときに使うイメージを持ってもらえるのではないかな。
- ・今回の指針の目的として、観光地域づくりにおいて、こういったものをより地域側に積極的に活用して欲しいということであれば、分析の軸やある程度やり方をどうすれば良いのかというところが非常に重要だが、最終的には「活用」というところが地域にとって一番の興味関心になってくる。活用のイメージが具体的に湧けば湧くほど、それがモチベーションになって、分析をしていきたい、活用をしていきたいということになっていく。
- ・データ分析の軸は非常に大事だと思いつつも、活用のところがもう少し厚くなると、この業界におけるデータ分析の活用というものが推進されるのではないかなと思う。
- ・基本となる指針と調査結果を活かすことの間には、もっと細かい事例なり、もしかしたら本来コンサルティングのようなビジネスが入るべきという考え方もあるだろうし、解析結果を活かすことにビジネスチャンスもあるだろう。地域での活かし方も変えられるということもイメージできるようにできれば。
- ・今回得られたデータをどう「活用」していくのかということを考えるとき、地域にとっては、

既存の統計データも含めると、かなり多量のデータを持つことになるため、データ間の様々な特性をどこで解説するかも大きな課題。人の行動が多いのに満足度が低い、あるいは満足度が高いのに消費額が低いといった、データ相互間のミスマッチが出たときに、どのように捉えて戦略に反映させていくのかという悩ましい問題が出てくるだろう。データ分析全体のノウハウと関わってくるが、経年的にどんどんデータが出てくるなかで、それぞれのデータの特性を自治体にどう伝えていくか今後の課題だろう。

- ・分析事例とコストの関係が分かれば自治体は助かるだろう。手間、解析レベルとコストの関係について情報を吸い上げるようなスキームがあれば。
- ・指針については、よくまとまっているという印象。今後継続的に調査をしていく場合には、年による偏差も出てくるだろう。経年的に大枠を押さえた上で連続性が必要かと思う。
- ・観光地でのデータとしては、観光地への来訪者から一日モニターというような形でデータを蓄積して集約するようなシステムができていくと、その地域にとっての周遊データは効率的に集められるだろう。コストダウンという観点からは、GPSデータの別の使い方として、そういう取組も含意させても良いのではないか。

### (3) ICTを利用した観光振興について

- ①「スマートデバイス×観光 リクルートライフスタイル社の取り組みとこれから」  
株式会社リクルートライフスタイル ネットビジネス本部 スマートデバイスグループ  
田川勇輝 氏よりプレゼンテーション
- ②「スマホ×カーナビ連携アプリ「Navicon」の観光利用」  
株式会社デンソー 情報通信サービス開発室 担当次長 安保重敏 氏よりプレゼンテーション

#### ◎委員からの意見

- ・国内旅行市場におけるマーケットシェアについて言えば、宿泊市場は50%以上が50代以上であり、典型的なシニア市場である。逆にスマホは若年層の市場で、例えばソーシャルゲームは10代20代をターゲットにしている。大切なのはスマホというデバイスを使うことではなく、「いい出会い」があること。ユーザーが求める観光資源であったり、宿泊施設がストレスなく見つかるということが一番大切だ。
- ・スマホ上の位置をカーナビに送るとするのは面白いサービスと感じた。位置を言語ではなく、アプリで伝えるというのは、世の中の動きを捉えるためにはいい仕組みだと思う。
- ・過去は情報が一つに集まっていることに価値があったが、インターネットや検索サービス、ソーシャルメディアの登場で、現在は情報が一つに集まっていることの価値は低下していると感じる。この状況下では、情報を集めるだけでなく、その情報によって行動に移せる「枠」を多く集めることが価値を生むのではないかと考えている。
- ・観光市場においては、まだネット上の情報とリアルな魅力が結びついていない。素晴らしい地域資源を持っている人たちと、それを求めている人たちをマッチングさせることで地域振興につながっていけば。

- ・逆に、情報とリアルの結び付きについては、観光においてはいまのままにしておくべきではないか。観光の演出として、偶然の情報との出会いというものの満足度が極めて高いということもある。
- ・地域のコンテンツには2種類ある。その資源があるからその地域に行くという誘客力のあるコンテンツと、そこで出会うことで満足度が上がるコンテンツとがある。そういう切り分けが必要だと考える。人を引き付けられるような素晴らしいものは発掘して発信しなければならないし、地域に来て偶然に出会うコンテンツも必要で、それを演出する力も地域に求められているだろう。

### ③「多言語音声翻訳システムの紹介」

総務省 情報通信国際戦略局 技術政策課 研究推進室 課長補佐 酒井雅之氏より  
プレゼンテーション

#### ◎委員からの意見

- ・地名や方言など、地方でのローカルな情報をどうコーパスに組み込んでいくかが観光面での課題であると思う。今後の活用を期待したい。

#### (4)「観光ビッグデータ」を活用した観光振興の中間とりまとめについて

#### ◎委員からの意見

- ・「観光ビッグデータ」という言葉をどう定義するかもあるが、観光に関係する多様なデータ、特に行動や意識が表れるようなデータを広く集めて統合的に解析していくことで、あるいは重ねあわせることで色々なことを見ていくということを対象に考えていく。今回のワーキンググループで議論の俎上に載ったものは全て対象になっていると考えて良いだろう。
- ・観光振興を行う立場の人によって異なるところがあるだろう。大きく分けて国の立場で観光振興を考えて、ビッグデータをどう使っていくかということ、将来的に地域に落とし込んでいく見込みで整理する部分と、まさに自治体の方々がこういう風に活用して欲しいという部分との、二段構え、あるいは二つのパートが必要だと思う。
- ・いままでの議論の成果をまとめるとなると、おそらく位置情報の活用という部分が強く、広範にICTの議論であるとか、質的な書き込みデータといったものについては余り考えきれていない。観光振興でそういったものを包括的に使っていくという観点では、今回のワーキンググループではまだ緒に付いたところであり、もっと違うことも考えていかなければならないだろう。今回の中間とりまとめは、イメージとしてはまずは統計を補完するための位置情報の活用といったところがメインであり、今後は質的なデータも使って取組をしていかなければならないという話を進めるにあたっての、中間とりまとめというよりもむしろ初歩というところだろう。

以上